

令和元年6月14日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26360035

研究課題名(和文) インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

研究課題名(英文) Handicrafts as a Community Resource and Cultural Recovery after Disaster in India

研究代表者

金谷 美和 (Kanetani, Miwa)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員

研究者番号：90423037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2001年に発生した地震被災地であるインド、グジャラート州の伝統工芸を事例に、大規模自然災害によって被災した地域社会の復興過程を明らかにしたものである。

染色品生産者は新村を建設して生産基盤の移転をはかった。在来技術による染色品生産が「手工芸」という概念と領域に包含され、「手工芸」がグローバルに通用する記号となった。「手工芸」が国内外の災害支援を引き寄せ、支援のネットワークをつくり新村建設の推進力となった。つまり、生産者が「手工芸」をコミュニティ資源として活用することで、国内外の支援をあつめ、復興を成功に導いたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界的に大規模自然災害の発生により甚大な被害を受ける地域は増えている。我が国においても、2011年の東日本大震災後、地域社会の復興を迅速にすすめるための知識や手法の確立は喫緊の課題となっている。社会的要望に応えるかたちで、社会や文化の復興にかかわる文化人類学的研究の成果は近年蓄積されはじめている。長期にわたって被災社会を観察した本研究の成果は、災害研究の比較研究や普遍化に意義があり、日本国内外における災害復興の課題にも寄与するものである。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to clarify the reconstruction process of a community affected by a large-scale natural disaster by examining the case of a traditional handmade textile maker in Gujarat, India, an area affected by an earthquake in 2001. 1) The textile maker constructed a new village and attempted to transfer the production base. 2) The textile, which was produced through indigenous skill, was understood to be “handicrafts,” which became a widely accepted symbol in the global market. 3) “Handicrafts” attracted domestic and international disaster relief and created a support network, becoming a driving force for the construction of new villages. In conclusion, textile makers use “handicrafts” as a community resource to gather domestic and international support and drive successful reconstruction.

研究分野：文化人類学

キーワード：災害 復興 手工芸 インド ローカル文化 集団移転

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、災害被災地を対象とした人文社会学的研究の意義が高まっている。我が国では、防災の観点から工学系の災害研究が蓄積されてきたが、1995年の阪神・淡路大震災により迅速で適切な被災地の復興に寄与するような災害の社会学的な研究に対する要望が生じ、防災学にも文化人類学的な研究手法や民族誌記述が取り入れられるようになった。さらに、2011年の東日本大震災では、津波や原発事故により居住地の移転をせまられる被災者が多数にのぼったため、被災地のコミュニティ再建をすすめるために、地域社会の分析を得意とする文化人類学的な視点の重要性はより高まっている。海外においても、災害に脆弱な途上国を中心に文化人類学的な研究が蓄積されている [Oliver-Smith and Hoffman 1999, 2002]。

(2) 筆者は、本研究の調査地において地震以前の1998年から2000年にかけて職能集団を対象とした長期現地研究を行い、博士論文と著書を執筆した [金谷 2007]。2001年にインド西部地震 (M7.7) が発生し、調査対象が被災したため並行して災害復興に関する現地調査に取り組んだ。これまで、被災住民と援助者の関わりに焦点をあてた研究 (トヨタ財団研究助成 D03-A-438)、都市部の移転にともなうコミュニティ構築に関する研究 (科研費 16251012、20251011) さらに本研究につながる伝統工芸に従事する被災者の新村建設に伴う移転とコミュニティ構築に関する研究 (特別研究員奨励費) に取り組んだ。このように、本研究は当該地域における長年にわたる現地調査に蓄積に基づいて実施されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、インド、グジャラート州カッチ地方において、2001年の地震で甚大な被害を受けた伝統工芸である染色工芸の生産者たちが、危機的状況にあった生業を復興・維持するために新村を建設途上であるという事例を対象にして、「手工芸」をコミュニティ資源として、ローカル文化の再編を行っている過程を明らかにすることが目的である。新村建設を契機として、在来の染色技術やデザインが再編され、カッチ地方全域に散らばっていた染色業の拠点が「産地」として統合されていく経緯を示すとともに、在来技術による染色品生産が「手工芸」という概念と領域に包含されていくこと、「手工芸」がグローバルに通用する記号となって、国内外の災害支援を引き寄せ、支援のネットワークをつくりあげることによって新村建設の推進力となったことを示す。

## 3. 研究の方法

(1) 新村における復興状況を明らかにするための現地調査：移転プロジェクトの組合長に対する聞き取り調査、移転した全世帯、移転準備中の旧村の全世帯についての世帯調査を行った。

(2) 染色品が「手工芸」として象徴化される過程を明らかにするための調査：新村への移住者が移住前に従事していた村の特定を行った。そこで行っていた染色業を明らかにするために、移住者に対して、在来技術、周辺地域・民族集団との関係、製作していた染色品についての聞き取り調査を行った。さらに、移住前の村で制作されていた染色品に対して熟覧調査を行った。

(3) 支援側が、被災者の製品を「手工芸」として認識していることを明らかにするための調査：国内外のNGOの支援担当者に聞き取り調査を行った。

(4) 消費地において被災者の制作した染色品が「手工芸」として流通していることを明らかにするための調査。インド国内外の店舗や展示会を視察し、被災者の制作する染色品の販売状況の詳細を記録した。

## 4. 研究成果

(1) 被災した旧村から新村に移転が完了したことを明らかにすることができた。旧村は世帯数375、人口2000人のうち死者は108人にのぼり、ほぼ全ての家屋が全壊、半壊した。旧村の住民のうち、染色業に従事する職能集団カトリーに属する115世帯、約800人が、新村を建設して移転を計画した。2015年におこなった世帯調査では、97世帯、485人の住民が新村に居住し、9割が染色業に従事していることが明らかになった。また、42軒の染色工房が稼働していた。染色業は工程ごとに分業されており、各工程に従事するための雇用がうまれている。生産基盤としては、共同の洗浄タンク、浄水設備、井戸と貯水池と配水ラインが完成した。生活インフラとして住宅地、上水道、学校、宗教施設が完成した。

(2) 支援者と消費者の間で、被災者の制作する染色品は「手工芸」としての認識が確立し、流通していることを明らかにすることができた。「手工芸」とは、手仕事により製作されたものことであり、近年のグローバル市場におけるエシカル(倫理的な)・ファッションに対する関心や需要を反映して、「手工芸」による服飾素材に市場価値が生じている。例えば、天然染料や天然素材を利用して在来技術により製作された布を使用したり、伝統的服飾をモチーフにした

服飾デザインなどがそれに当たる。新村において製作される染色品のなかでも、「アジュラク」という特定の染色品が、新村建設のシンボルとして認識されるようになった。対外的なシンボルとしてのイメージは被災者にも内在化され、セールストークのなかで、アジュラクの歴史や意味に関する定型化されたストーリーが確立されたり、被災者である生産者のアイデンティティとして語ることが観察された。在来技術による染色品が「手工芸」という概念と領域に包含され、「手工芸」がグローバルに通用する記号となったことを示すことができた。

(3) 世帯調査により、旧村からの移住者だけでなく、他村から移住を繰り返して新村に移転してきた世帯が約3分の2を占めることが明らかになった。その結果をうけて、さらに聞き取り調査を重ね、移住前にどこに居住していたのか、そこでの生業は何をおこなっていたのか、についてデータを収集したところ、カッチ全域のさまざまな村で染色業に従事していた人びとが、新村に移転してきたことを明らかにすることができた。震災前の染色業の生産地の特定を行い、カッチ全域の震災以前の染色業の場所をマッピングすることができた。それぞれの場所について、染色の業態や製品についての情報を集積した。新村建設を契機として、カッチ地方全域に散らばっていた染色業の拠点が「産地」として統合されたことを明らかにすることができた。さらに、カッチ地方には多数の染色品が製作されていたにもかかわらず、在来の染色技術やデザインが再編され、特定の「アジュラク」だけが伝統的染色品としてシンボル化されていったことを明らかにすることができた。

(4) 新村建設組合は、新村の村名として特定の染色品の名称である「アジュラク」を冠した。そのことで結果的に、「アジュラク」という染色品と震災復興にむかう新村が結びつき、新村は「アジュラクの村」として知名度を獲得した。震災復興支援者が新村にアクセスしやすくなっただけでなく、アジュラク商品の販売数が増えることによって、新村の雇用を確保し、生産基盤の確立に寄与した。「アジュラク」という「手工芸」が国内外の災害支援を引き寄せ、支援のネットワークをつくりあげることによって新村建設の推進力となった。つまり、生産者が「手工芸」をコミュニティ資源として活用することで、国内外の支援をあつめ、新村建設を成功に導いたことを明らかにした。

(5) 本研究の成果は、2011年に発生した東日本大震災の被災地を対象とした共同研究(課題番号24320173、18H00777)にも生かされている。東日本大震災後、文化人類学的研究の成果があらわれはじめ、本研究の研究課題と関心を等しくするような、災害被災地の文化変化や文化復興を論点とするものが注目されている。長期にわたって被災社会を観察した本研究の成果は、災害研究の比較研究や普遍化にとって意義があることを確認することができた。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 1 件)

金谷美和「手仕事を復興すること インド西部地震被災地の布工芸生産者 - 」『人類学研究所研究論集』南山大学、第4号、pp.44-64(査読無)(2018年3月)

### 〔学会発表〕(計 9 件)

金谷美和「大規模自然災害後の集団移転と「社会変化」 インド西部地震被災地の事例から」日本文化人類学会第52回研究大会、2018年6月2日、弘前大学

金谷美和「アジュラク コピー技術に接続する木版捺染布」MINDAS第4回合同研究会「インドの布生産現場から 文様と知的所有権」、2017年2月4日、国立民族学博物館

金谷美和「手仕事にみる被災の経験:インド西部地震と東日本大震災」記憶風景を縫う第7回勉強会、2016年12月17日、宮城県仙台市 bdbdbd (招待講演)

金谷美和「女性の手仕事と被災地支援 インド西部地震と東日本大震災の事例より」シンポジウム「人間の復興と女性のエンパワーメント女子大学から立ち上がる復興の新たなかたち」2016年11月19日、宮城学院女子大学(招待講演)

金谷美和「手工芸生産者の被災と復興 インド西部地震被災地の14年間」南山大学人類学研究所 公開シンポジウム【手しごとと復興】 2016年1月24日(招待講演)

金谷美和「2001年 インド西部地震後の14年」東洋大学アジア文化研究所 第10回年次集会 2016年1月23日(招待講演)

金谷美和「インド更紗と水 伝統工芸の持続可能性を考える」シンポジウム【資源と人のかかわり 南アジアの手仕事から】第48回南アジア研究集会 京都で林間学校、2015年7月25日、京北山国の家

Kanetani Miwa, Symbolizing Ajrakh: Mediating between Artisans and the Global Market Across India and Japan, 9th The International Convention of Asia Scholars in Adelaide, Australia 7 July 2015.

金谷美和「更紗工房の歴史エスノグラフィ　インド西部グジャラート州における木版の分析から」民族藝術学会第30回大会研究発表、国立民族学博物館（2014年9月21日）

〔図書〕(計 3 件)

『インド・剥きだしの世界　暴力/環境/身体』田中雅一・石井美保編、京都大学学術出版会（金谷美和「災害復興と宗教的マイノリティ」を分担執筆）2019年出版予定

『トラウマを生きる』田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会（金谷美和「大きな物語に抗する　災害の経験と記憶」を分担執筆）2018年、521-549頁。

『アジア太平洋諸国の災害復興　人道支援・集落移転・防災と文化』林勲男編、明石書店（金谷美和「集団移転と生業の再建　二〇〇一年インド西部地震の被災と支援」140-165頁を分担執筆）2015年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。